

序 文

柏木 哲夫

(日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団理事長)
金城学院大学学長

わが国のホスピス・緩和ケアの現状を概観する『ホスピス緩和ケア白書』は今回の2006年度版で3冊目になる。さまざまな課題を抱えながら日本のホスピス・緩和ケアの働きが着実に社会に根づきつつあることはご同慶の至りである。1970年代に始まった日本のホスピス運動は着実に広がり、2005年12月1日現在、公認のホスピス・緩和ケア病棟は153施設、2,890床になった。

2005年はホスピスに関わる者にとっては、一つの大きな節目となった。現代ホスピスの創始者とも、世界のホスピスの母とも呼ばれたシシリー・ソンドース博士のご逝去である。博士は2005年7月14日、87歳で天に召された。ご自分のホスピスで静かな最期だった。29日には身内と親しい友人、知人、50人ばかりで葬儀が執り行われた。博士の生前のご希望だったようである。司式をした牧師さんが博士の「I did not found hospice. Hospice found me」という言葉を紹介されたそうだ。「私がホスピスを創ったわけではありません。ホスピスが私を見出してくれたのです」という意味である。「found」には、創るという意味と、find（見出す）の過去形としてのfoundがある。彼女はこれを巧みに使って、とても重要な、意味深いことを表現した。

さて、『ホスピス緩和ケア白書2006』の特徴をひと言でまとめると、「教育」に焦点を合わせたということであろう。一つの分野がその分野の教育に取り組み始めるということは、その分野が成熟してきた証拠である。ソンドース博士が1967年に設立したセント・クリストファ・ホスピスには「Study Center」と呼ばれる独立した建物があり、世界中から訪れる人たちの教育に当たっている。このホスピスが成熟している証拠である。

白書の中では、さまざまな職種の教育が取り上げられている。看護師や医師の教育のみならず、ソーシャルワーカー、薬剤師、栄養士、その他のコメディカルスタッフの教育にも触れられている。また、人材育成への提言、そのための支援事業についても書かれている。多忙な臨床の日々の中で、執筆してくださった皆様に心から感謝したい。

この白書がホスピス、緩和ケアに従事している人たちや、これから新たに取り組もうとしている人たちの参考になることを願っている。